

信濃では月と仏とおらがそば

——この句は一茶の句ではない——

江戸蕎麦（旧寺方蕎麦）研究会

小林 尚人

江戸時代の俳人小林一茶（1763~1827）の句に《雀の子そこのけそこのけお馬が通る》《やれ打つな蠅がてをすり足をする》《やせ蛙負けるな一茶是に在り》がある。この句は大正7年（1918）から昭和7年（1932）にかけて尋常小学校国定教科書に採用されている。小さな生き物に対する慈愛と優しい眼差しが詠われているため、一茶という名前が大人から子どもまで、広く知られるようになったのではないかと推測される。

一方、一茶の句と言われている『信濃では月と仏とおらがそば』という句がある。一茶の故郷信州の三大名物「月・仏（善光寺）・蕎麦」が、語呂よく詠みこまれリズム感が有って覚えやすいことから、多くの人びとに親しまれているようである。しかし、これは一茶の句《そば時や月のしなのの善光寺》（文化9年）の模倣ではないかと言われている。何分にも一茶には伝説めいた逸話が沢山あり、この「信濃では」の句もその一つのようなのである。そこでこの句について考えてみたいと思う。

◇ 信州の姥捨は「田毎の月」で有名である。ここに長楽寺という古刹が在り「信濃では月と仏とおらがそば 一茶」と刻まれた句碑が建碑されている（現在は近くの公園に移設されている）。これは所在地更埴市（現在は千曲市）が、昭和48年（1973）宇和島市と姉妹都市の提携をした記念に、宇和島市から寄贈されたものである。碑文に「一茶」とあることからこの句は一茶の句であると思われるようである。

◇ 一茶同好会（代表）中村六郎（1868~1924）が編集兼発行の『俳諧寺一茶』（明治43年8月13日発行）には、一茶の顕彰者束松露香（1865~1918）が次のように書いている、【一茶江戸にありて、始めて夏目成美を浅草蔵前の宅に訪問したる時、店頭の者は、其扮装の甚だむさぐるしきを見て、其名も問はず、主人にも告げずして、不在と称して、躰よく門前拂をなせしに、一茶は態々土産にとて携え来りし郷里の名産蕎麦粉を直ちに玄関に撒き散らして、其上に指もて、**信濃では月と佛とおらが蕎麦**と書き捨て、其儘立去らむとせしに、始めて信州の一茶と知れ、前きの非禮を謝して、慇懃に請ぜられしといふ】。この文章は束松が明治33年（1900）4月から121回にわたり信濃毎日新聞に連載した、「俳諧寺一茶」の原稿を基にしたものである。

この束松の記事（逸話）について少し検討してみると。「江戸において」とあるが、江戸時代一茶の俳諧活動は概ね26年にわたるが、西国の旅（1791~1798）を含め活動が多岐で、そのためこの逸話が何時頃のことか記事では分からない。そして江戸時代蔵前は夏目成美（1749~1816）の店を含め札差の店が集まって居た。しかし成美は若いとき通風を患いその後遺症で右足が不自由であった。そのため寛政12年（1800）には隠居して、馬場町に隠宅を構え遊俳生活を楽しんでいる。したがって一茶が店の方へ成美を訪ねることは考えにくい。一茶と成美の出会いは、寛政12年（1800）12月27日、二人で両吟を巻き《雉鳴いて朝茶ぎらいの長閑也 成美 二葉の菊に露の木庭るゝ 一茶》（連句）と詠んでいる。これは、成美がさりげなく一茶の力量や人柄を試したのではないかと推測される。

ている。したがって二人が知り合ったのは両吟を巻く前ではないかと思われるが、明確なことは分からない。享和3年(1803)6月13日の日記には『随齋二入ル』(享和句帖)とある。41歳で正式に随齋会に参加することが認められたようである。

その後、一茶は文化9年(1812)50歳のとき、江戸に見切りをつけ故郷柏原に帰郷して庵を構え《これがまあつひの栖か雪五尺》(文化9年)と詠んで、俳諧宗匠の活動を始めている。”信州の一茶”と言われるようになるのはこれ以降のことである。したがって東松の逸話が信濃に帰ってからだとするならば、一茶はすでに江戸で成美の知遇を得ている。この記事は単なる逸話に過ぎないことになるだろう。

また、次のような一茶伝説がある。

◇ その概要は【一茶の話友たちである僧侶が上州に居り、一茶が訪ねたときのことで。家で穫れた蕎麦粉を障子紙で袋を作り、二升ほど入れ糊で口を止めて持参し、勝手口で呼ぶと小坊主が出てきで「御坊は居られるか」尋ねると、小坊主は、余りにもひどい姿なので物乞いの乞食ではないかと思ひ、御坊は留守だと嘘を言う。すると一茶は、それは残念だと言ひ、蕎麦粉の袋を取り出して角を切り小さな穴をあけ、庫裡の台所の土間に袋からでる粉で「信濃では月と仏とおらがそば」と書いて、御坊が帰ったら宜しく伝えてと言ひて帰ってしまった。小坊主は、すぐに御坊に伝えると、それは大変だと驚き表に出て二人で探したが一茶は行方が分からなかった。】(長野市の関茂治氏の話)この伝説は前記の東松の逸話と同じで年代が不明である。信濃から出向いたのだろう、しかしこの時一茶は地主農家であるが、農地は全部小作させているから「家で取れた蕎麦粉」はないはずである。逸話では尤もらしく、蕎麦粉の袋の角を切り小さな穴をあけて蕎麦粉で庫裡に句を書いている。農民が苦勞して収穫した蕎麦粉を粗末にすることは考えられない、その点うまく尾ひれを付けた話になっているようだ。

◇長野郷土史研究家小林計一郎(1919~2009)は、(長野市で生まれ育ち、地元在って長野県の郷土史や自治体史の編纂に寄与している、特に小林一茶をはじめ、善光寺、真田幸村(真田家)の研究には造詣が深い。)『信濃では』の句について『この句は後人が作って一茶にこじつけたもので、一茶の作ではないことが明白である。』と明言され、その理由を挙げている。

①一茶は、おびただしい句日記や句文集を書いているが、それらのなかにこの句がみえない。

②一茶の三回忌にその門人たちが編集・出版した「一茶発句集」にこの句がない。

③右の句集を増補した「嘉永版一茶発句集」にもこの句がない。

つまり、一茶の門人たちはだれもこの句を知らなかったし、しかも、さいしょの「一茶発句集」にもれた句を補った句集にさえないのだから、まず江戸時代には、一茶のこの句は知られていなかったと考えてよい。

④一茶と関係の深い柏原の旧本陣中村家では、この句は、同家出身の中村六郎(1868~1924)の作だと言っている。中村家は代々六左衛門と名乗っているが、九代目六左衛門利為(新甫)という人は一茶に読み書きを教えたといわれる。十一代目六左衛門の三男に六郎利謙という人があった。この人は明治元年の生まれで、字や絵がうまく、俳句も好きだった。いったい中村家は代々俳句を好み、字や絵がうまく、六郎の兄六左衛門利貞も俳諧寺を嗣いだ可秋という俳人を応援して「一茶一代全集」という本を出版させた。この本にも「お

らがそば」の句は出ていない。(注1) 中村利謙＝中村六郎利謙、六郎は通称。

⑤中村家では氷ソバといって、ソバを寒中に凍らせたものを売り出していたが、その宣伝を兼ねて、この句を世にひろめたのだと伝えているが、おそらく事実だろう。「尾ひれがついて……」(と小見出しを付け) この「おらがそば」の句は、六郎の親友でもあった東松露香の「俳諧寺一茶」によっていっそう有名になった。信濃毎日新聞明治三十三年八月十五日の第一面に「俳諧寺一茶(百一)一茶の奇行」として、この逸話が紹介されている。

(注2) 逸話は前記夏目成美訪問の話と同じ内容のため省略する。

(注3) 中村六郎、東松露香および一茶同好会については、「一茶の顕彰者①中村六郎、②東松露香③一茶同好会」として、江戸蕎麦(旧寺方蕎麦)研究会の学習資料として発表しているので、ここでの説明は省略する。

◇文筆家中田敬三(1932～)は、(長野市在住で信濃毎日新聞の論説委員・編集委員を歴任し、食物史、遊戯史の造詣が深い。)『信濃では』の句について、『はっきりしているのは「信濃では月と仏とおらがそば」は一茶の句ではないということである。』と明言している。しかし誰の句とは言及していない。

◇ 以上一連の話は全て明治時代以降のことである。

したがって『信濃では』の句は、「一茶の句ではない」。これは「中村六郎の作である」と言うのが自然であり、通説であると考える。

それにしても、一茶の俳句は、芭蕉や蕪村とは違う味わいがある。「ユーモアと皮肉」「あきらめと楽観」が「子どもや小動物」に対する慈愛のこもった眼差しで、無為を重んじる姿勢で詠まれている。加えて貧乏を捨てず江戸の「いき」や「通」に逆らって「野暮」を生き《椋鳥と人に呼ばるゝ寒(さ)哉》(文政2年)と詠んで、僻みと自嘲そして反抗心を持ち、自分と同じ弱いものには同情した特異な詩人だったといえよう。

[参考] 巷で、一茶の句と言われている句は、『信濃では』のほかに次のものが挙げられる。

『何のその百万石も笹のつゆ』、 『子供等が神様と言ふ梅の花』、 『盥から盥に移るちんぷんかん』 『親は死ね子は死ねあとで孫は死ね』、 『そばの花江戸のやつらがなに知った』、 『我里は月と仏とおれと蕎麦』

以上

参考文献

「俳諧寺一茶」	編集兼発行者 一茶同好会	発行 東京堂	明治43年8月発行
「一茶全集」	編集 信濃教育会	発行 信濃毎日新聞社	昭和51年～昭和55年発行
「小林一茶」	栗山理一 著	発行 筑摩書房	昭和45年12月22日第一刷発行
「小林一茶」	小林計一郎 著	発行 吉川弘文館	平成14年第5刷発行
「物語 信州そば事典」	中田敬三 著	発行 郷土出版社	1999年発行
「長野」第51・70・167・168号	長野郷土史研究会機関誌		

(2021-04-30)